

看護大学生の臨地実習における口腔ケアに関する 実践内容の経年比較

桑村由美, 岸田佐智

徳島大学大学院医歯薬学研究部

1. はじめに

近年、口腔と糖尿病や心疾患、誤嚥性肺炎、低出生体重児の出産、早期産など全身との関係が明らかになるとともに、口腔ケアの疾病予防効果や全身の健康保持・増進効果のエビデンスも明らかになるに伴い、口腔ケアの重要性が再認識されてきている(1)。そして、口腔ケアの実施は、歯科医師や歯科衛生士などの歯科専門職だけではなく、患者の身近に位置する看護師への期待も大きい(2)。そのため、看護学教育の中での口腔ケアの位置づけを見据えた上で、口腔ケアに対する教育の在り方を検討するための一助とする目的で、我々は、2015年度より看護大学生の臨地実習での口腔ケアの体験について調査(3)(4)を継続している。

本研究の目的は、2016年度(4)と2017年度の看護大学生が臨地実習で体験したと認識している口腔ケアの実践内容の経年比較を行い、教育の課題を検討することである。

2. 方法

1) **対象**: 看護基礎教育課程を4年制のA大学で教育を受けている4年次学生

2) **調査時期**: 2016年度および2017年ともに4年間の総まとめの臨地実習である看護統合実習を終えた7月下旬。

3) **調査方法**: 自記式質問紙調査で、看護統合実習終了時に本研究の目的を説明後に調査用紙を配布し、協力が得られる場合には回収箱への投函を依頼した。

4) **調査項目**: 先の研究(4)で用いた質問項目(臨地実習で体験する全ての領域の対象者の状況を想定して作成。自分の口腔セルフケアの実施状況、現在の口腔内の状態と歯科受診・受療行動、口腔

への興味・関心・知識、臨地実習での口腔ケアの体験と自己評価)。なお、口腔ケアには、観察・援助・教育の3種類の内容を含めた。

5) **分析方法**: 個人属性の基礎集計、各変数の記述統計量の算出を行い、解析ソフトはIMB SPSS 19.0 for Windowsを用いた。

6) **倫理的配慮**: 本研究への参加は自由意思とし参加の有無により学習や成績評価に何ら不利益を生じないこと、無記名で行い、集計結果は統計的に処理し個人が特定されないように配慮すること等を口頭および文書で説明した。なお、本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号2329)。

3. 結果

1) 対象者の概要

2016年度は61名(回収率91%)、2017年度は61名(回収率90%)であった。

以下、データは2016年度/2017年度の順に表示する。

年齢は21.8±1.9歳/21.9±1.7歳(平均値±SD)であった。自分の口腔のセルフケアの実施状況は、口腔内の観察51名/43名、歯間ブラシの利用14名/15名、歯科用フロスの利用14名/13名、歯1本ずつの丁寧な歯磨き37名/44名、歯茎の境目の歯磨き57名/56名、歯ブラシの携帯17名/9名であった。現在の口腔の状態は、歯の痛み6名/6名、歯磨き時の出血31名/19名、喫煙2名/0人で、自分の歯の本数を知っている学生は17名/23名であった。

2) 学生が臨地実習で体験した口腔ケア

① 口腔ケアを体験した対象者の状態

運動機能に問題があり日常生活行動の一部分で援助を受けていた人40名/37名、術後・重篤な

状態・末期などのため日常生活のほとんどについて援助を受けていた人 33名/29名、知識不足などのため教育的支援・指導が必要な状態であった人 30名/31名、認知機能に問題があり日常生活行動の一部で援助を受けていた人 25名/26名であった。

②指導のもと実施した口腔ケア

多かった順に、口腔内の観察 24名/口腔内の観察 38名、歯ブラシでの歯磨き 20名/舌ケア 28名、舌のケア 18名/歯ブラシでの歯磨き 28名であった。少なかったものは順に、歯磨き指導を受けた経験の確認 2名/口腔内の痛みの確認 1名、口臭 2名/歯科受診状況 2名、かかりつけ歯科の有無 3名/かかりつけ歯科の有無 2名であった。なお、歯の総数の確認は 4名/4名であった。

③見学した口腔ケア

多かった順に、口腔内観察 22名/歯ブラシでの歯磨き 17名、舌ケア 22名/保湿ジェルの塗布 16名、歯ブラシを用いた義歯の清掃 20名/口腔内観察・舌ケア 15名であった。なお、歯の総数の確認は 4名/6名であった。

④実施も見学も行っていない口腔ケア

多かった順に、歯科受診 55名/歯への思いを尋ねる 55名、歯磨き指導を受けた経験 55名/歯科受診状況 54名、口臭 54名/口腔内の痛み・かかりつけ歯科の有無 52名、歯の数を数える 53名/49名であった。

4. 考察

2016年度と2017年度では、学生自身の口腔のセルフケアの実施状況や、学生が口腔ケアを体験させて頂いた対象者の状態には大きな相違はなかった。学生が体験した口腔ケアは、口腔内の観察、歯磨き、舌のケアが多く、これまでの調査(3)(4)と同じであったが、2017年度は指導のもとでの実施率が増えており、口腔ケアを体験できた学生は観察に基づき歯や舌のケアができたことが推測される。

口腔ケアの実施に当たっては口腔のアセスメントの実施が必須であり、特に、歯の総数は口腔機能の基盤情報であり重要であるが、自分の歯の総数を知っていると答えた学生の割合は依然、17

名(28%) /23名(38%)と低かった。臨地実習での歯の総数の確認の実施率も、指導の下での実施と見学をあわせて、8名(13%) /10名(16%)と低かった。窪田ら(5)は、全身の状態を踏まえた上での口腔の状態のアセスメントの実施、口腔ケア方法の選択、実施、評価といった一連の問題解決行動のトレーニングの必要性を述べている。口腔ケアの重要性が再認識されるに伴い、教育のあり方も討議され、看護学の専門化に伴う歯科医学に関する教育内容の削減を危惧する意見(2)が提言されるなど、看護教育への関心も高まっている。科学的な根拠に基づく口腔アセスメントを含んだ汎用性のある口腔ケアの教育内容と教授方法の検討が必要であり、今後はカリキュラム全体の中での位置づけを見据えて、段階的な教育を検討する必要があると考える。

5. 結論

臨地実習終了後の看護大学生が体験したと認識している口腔ケアは口腔内の観察、歯磨き、舌ケアであり、2016年度と比べ2017年度は指導のもとでの実施率が増えていた。口腔ケアの基盤となる口腔アセスメントに関する教育の検討の必要性が示唆された。

6. 引用文献

1. 小川 郁：日常診療における口腔ケアの意義. 日本医師会雑誌 144：453, 2015
2. 久 育男 他：日常診療に必要な口腔ケアの知識】口腔ケアの現状と問題点(座談会/特集). 日本医師会雑誌 144：457-468, 2015
3. 林 希望 他：看護学生の口腔ケアに対する認識と体験. 第39回中国・四国精神保健学会 102, 2015
4. 桑村由美 他：看護大学生の臨地実習における口腔ケアに関する実践内容の実態. 平成28年度全学FD推進プログラム大学教育カンファレンスin徳島発表抄録集 12-13, 2016
5. 窪田恵子 他：病棟看護師が実践する「口腔ケアに関する認識」と「問題行動の自己評価」との関連. 日本看護学教育学会誌 27：25-50, 2017